

# 児童養護施設における「食」の現状と課題

— 現役職員へのインタビュー調査から —

Status of and Challenges with Meals at Children's Homes:  
Based on Interviews with Current Employees

古 山 さくら  
Sakura FURUYAMA

**要 約** 本研究の目的は、現在、児童養護施設では「食」そのものや「食」の場面がどのように提供され、また、職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかのについて明らかにすることである。東京都内に所在する X 児童養護施設の現役職員 3 名を対象に半構造化インタビューを実施した。その結果、施設職員は児童養護施設における「食」を職員と入所する子ども達の関係性構築や職員から子ども達へ安心安全の提供、子ども達の社会性構築といった、施設に入所する子どもたちにとって重要な役割を担うものであると捉えていることが明らかになった。さらに、施設職員は児童養護施設における「食」に様々な意味を見出し、入所する子ども達にとって「食」の手厚い取り組みは重要であると実感していながらも、ユニット職員の技術差や施設職員の意識差、配膳方法による影響といった課題があることも明らかになった。

**キーワード**：児童養護施設, 食, 関係性の構築, 安心安全の提供, 社会性の構築

**Abstract** The purpose of this study was to ascertain how food and meals are currently provided in children's homes and how staff perceive food in children's homes. Semi-structured interviews were conducted with three current employees of X home for children located in Tokyo. Results indicated that staff are using food at children's homes to build relationships with the children, provide safety and security to the children, and foster their social skills. Results revealed that the staff feel that food has an important role to play. Staff identify various meanings of the word "food" at children's homes and feel that generous efforts to provide "food" are important to the children in the facility. However, results also revealed that there are differences in the skills of unit staff and there are issues such as ways in which meals are served.

**Key words** : Children's homes, Food, Building relationships, Providing safety and security, Fostering social skills

## I. 背景と目的

児童養護施設とは、様々な事情により保護者がいない、または虐待など適切な養育を受けることができない子ども達の家庭に代わる生活の場である。2021 年 10 月 1 日現在、全国の児童養護施設は 610

か所あり、約 23,000 人の児童が入所し生活を営んでいる<sup>3)</sup>。また、厚生労働省<sup>4)</sup>によると「被虐待経験の有無及び虐待の種類」では児童養護施設は 65.2%で半数以上の入所児童が虐待を受けていることが分かっている。このような背景から子ども達にとっては保護者の養育を受けられないことに加え、通常経験するような食生活を経験したことがない、または家庭の中で親が食事を作る姿を見たことがないといった子どもも少なくないと推察される。

\* 家政学研究科児童学専攻  
Graduate School of Home Economics,  
Division of Child Studies

例えば、隈元ら<sup>1)</sup>は児童養護施設に入所する子ども達の多くは適切な養育を受けられなかったことから自己肯定感が低く、栄養学など食に対する知識があっても実行できない状況にあると指摘している。料理教室が児童養護施設入所児童の食知識、スキル、自己効力感に与える影響に関する研究では、施設退所後の自立支援を目的とした料理教室が施設に入所する子ども達にどのような影響があるのかを明らかにしている。料理教室に参加した子ども達は、料理工程を繰り返すことで食に関する知識やスキルを身につけることができ、さらに、調理中大学生と交流し励まされながら自分自身の納得できる出来栄を経験したり、他の参加者がうまくできる様子を目にしたりすることで参加児童の自己効力感が向上したことが明らかになった。これらのことから、児童養護施設における「食」の役割は非常に大きいと考えられる。食の場が安全で安心できる場であると伝えとともに、家庭での食体験に代わる環境づくりや取り組みを充実させ、子ども達の食生活基盤を固めることが必要であると言えるだろう。

また、和田上<sup>2)</sup>による児童養護施設における「食」に関する研究では大舎制施設や小舎制施設など様々な形態の児童養護施設における食の提供方法が整理されている。施設の形態や入所する児童の特徴に合わせ、朝夕時間を決め一緒に食事をとるようにしていたり、対照的に食事の時間を一定時間内に区切り、時間内であれば子ども達が自由に食事をとれるようにしたりするなど施設独自の取り組みが明らかにされている。その中で児童養護施設における食の位置づけとして、養育が各家庭によって異なるように、施設においても食の提供などのケアの内容が異なることは当然であるが、入所している子ども達の状況を踏まえた上で、食の場面において何をどのように提供すべきなのかについては整理すべきであると指摘している。

以上のように、これまでの先行研究では、いくつかの児童養護施設での食の取り組みについて比較しまとめている文献や、施設入所児童の食知識や食意識などのデータをまとめた文献が見られた。しかし、児童養護施設職員を対象とした施設における食の取り組みに関するインタビュー調査を行った文献は見られず、施設職員が実際の現場でどのような子ども達に対しどのような食の取り組みをしているのか、また、職員が児童養護施設における食をどのように

捉えているのかについては明らかにされていない。入所児童の実態を把握することも重要であるが、そもそも食を提供し、ともに生活している施設職員が食に対してどのような認識をもっているのか、という点を考察することもまた、重要であるだろう。これらのことから、本研究では現職の児童養護施設職員へのインタビュー調査をもとに、現在、実際の児童養護施設では食そのものや食の場面がどのように提供され、また、職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかについて明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査協力者と調査方法

本研究で用いるデータは、東京都内に所在するX児童養護施設の職員3名（自立支援担当職員A氏、ファミリーソーシャルワーカーB氏、ケースワーカーC氏）を対象に2022年8月に行った半構造化インタビュー調査で得られたものである。

インタビューはX児童養護施設内の相談室において3名同時に行い、約50分間施設での食の取り組みについて聞き取りを行った。質問内容は5項目（①X児童養護施設の概要、②X児童養護施設に入所する児童の入所理由、③X児童養護施設の食事などの生活スタイルについて、④児童養護施設における食の重要性について、⑤X児童養護施設職員の食育意識について）を中心とし、状況に応じて調査者が回答に対して疑問に思った点や関連した事情について詳しく質問しながら、柔軟に聞き取りを行った。

### 2. X児童養護施設の概要

X児童養護施設は2022年8月現在、本園に6名定員の小学生以上のユニットが8ユニットと小学生以下のユニットが1ユニットの計約55名が入所している。また、職員は本園以外も含め約100名在籍しており、そのうち直接子ども達に関わる職員は約60名である。今回の調査協力者であるA氏とB氏は以前子ども達と直接関わり生活支援等を行っていたが、現在は主に家族支援や自立支援に携わっているため直接子ども達に関わっていない。しかし、A氏B氏共に現場経験が長く今までに様々な子ども達と関わり支援を行っている。C氏は現在も直接子ども達と関わり、主に生活支援等を行っている。

X児童養護施設では本園の他にもグループホーム

が6棟、ファミリーホームが2棟あり、本園以外でも子ども達が日々生活している。

### 3. 分析方法

録音データを逐語録化し、まとまりのあるカテゴリに分類し、逐語録何度も読み返して語りの意味を分析した。

### 4. 倫理的配慮

研究協力に関する同意は、調査者がインタビュー開始前に研究の概要や調査の拒否、中止の自由があること、収集したデータは研究目的のみで使用されること、調査協力者および施設入所児童等、個人を特定できるような情報は公開されないことなどを口頭及び文書を用いて説明したうえで、調査協力者の自由意志のもと同意書に署名を得た。さらにX児童養護施設の施設長にも調査内容について上記の説明を行い、承諾を得た。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 入所児童の特徴

インタビュー調査で得たデータを整理した結果、X児童養護施設に入所する子ども達の最も多い入所理由は虐待であり、その中でもネグレクトが最も多い理由であった。施設職員のB氏によるとネグレクトは身体的虐待等に比べ、子どもに対して保護者からの愛情が注がれず、支援が最も難しい状況であるという。さらに、X児童養護施設では発達障害と診断される子どもが多く、約10年前には1ユニットに1人いる程度であった発達障害の子どもが現在では1ユニットの3分の2近くが発達障害と診断され、医療機関に通っている。そのため、施設職員のA氏によると食事面だけではなく生活面や勉強面など様々な場面で個別対応が求められているという。また、食の面での入所児童の特徴として偏食が挙げられた。施設に入所するまでの養育環境が劣悪であったことから食事をまともに与えられず、食に対する興味や関心が低い傾向があるという。

### 2. X施設における食事の提供方法

X施設での食事の提供方法は主に給食である。専属栄養士が考えた献立を施設内の調理室で調理員が調理し、ユニットごとに担当職員が配膳する。ユニットでの配膳の際には熱を加えたり、盛り付けた

りする最終調理をユニットの職員が行い子ども達に提供している。ただし、X施設では朝ごはんの提供方法に特徴が見られた。朝食は毎朝、前日に配られる材料をもとにユニットの職員が調理して提供している。例えば、献立がハムエッグであった場合、ユニットには卵とハムが配られ、それらをユニットごとに職員が調理して提供している。X施設ではユニットごとに配られた材料をすべて使用することを条件に調理の際、自由にアレンジしても良いことになっている。例えば、ハムエッグ用の卵を目玉焼きにしたりゆで卵にしたり子ども達の好みに合わせてアレンジすることができるのだという。

### 3. 児童養護施設における「食」の意味付け

#### (1) 関係性構築の「食」

児童養護施設における食の意味づけとして語られた一つ目は、職員と子ども達の関係性を構築する役割の「食」である。A氏とC氏は職員と子ども達の関係性構築の「食」について次のように語った。

**【C氏】** 児童養護施設の食は本当に大事です。逆に多少の関わりがうまくいってなくても食事で何とでも取り返せちゃうんです。子どもの心をつかむじゃないけど、関係性を築くうえではものすごく大切なきっかけになります。

児童養護施設における食の役割は非常に大きく、特に子ども達と施設職員の関係性を構築する上で大切なきっかけになっているという。続けてA氏は、児童養護施設における食がきっかけとなり子どもの心をつかむことができた入所児童と施設職員の関係性について次のように語った。

**【A氏】** 高校生のお弁当を作るのをすごく力を入れているんです。毎日毎日必ず作っているんですけど、作ったからってすぐ変わるわけではないです。毎日同じことをするから心に積み重なっていくというか。例えば明日の卵焼き甘いのがいいのか、だしが良いのか聞くじゃないですか。高校生くらいになると会話とかほとんどないので、食事の会話がなくなると日常的に喋ることが無くなります。でも弁当を介してやり取りして「美味しかったよ」とか、「ありがとう」とか弁当の話しかなかったんですけど、それが関係性のきっかけになるので、食はものすごく大事。

A氏は毎日の弁当作りを通して、卵焼きの味付けなど何気ない会話しかなくても弁当を作ることで気持ちが変わり、関係性を構築するためのきっかけになると実感していたことが分かった。職員が朝早くから弁当を作っていると、その様子を子ども達も目にするこゝろや作っている音や匂いを感じるこゝろができるだろう。さらに弁当はユニットで食べる食事と違い、自分一人のために作ってくれているため、無意識に自分のことを思ってくれていると愛情を感じることができると考えた。

弁当だけに限らず、「食」は職員から子ども達へ毎日続く、愛情を伝える手段の一つとなっているように感じられた。会話は無くても食が職員と子ども達をつなぐこゝろで信頼関係などの関係性が構築されていくのではないだろうか。特にネグレクトを受け、愛情を受けられなかった子ども達にとって、食を通して愛情を注いでいくこゝろは非常に大切なこゝろであると言えるだろう。

## (2) 安心安全を提供する「食」

二つ目の意味づけは、安心安全を提供する役割の「食」である。X施設での食事の際に子ども達に安心安全を提供する上で意識しているこゝろとして次のような語りがあった。

【C氏】食事って基本的に楽しくて気持ちが安らいで安全だなんて感じると思うんですよ。でも虐待を受けてきたお子さんの中には食事すらまともに与えてもらえなかった子がいるんですよ。なのでみんなで食事を囲むことが楽しいと知らない、というか、そもそもみんなで食事を囲むこと自体知らない子もいます。そういった子たちにはおいしいものを提供し続ける、温かいものは温かく、冷たいものは冷たくじゃないですけど、そういった関わりを大事にして食事って楽しいと感じてもらえるように意識してます。

被虐待経験のあり食に対してマイナスなイメージがある子ども達に対して、おいしい食を提供することで食事自体が楽しいと感じてもらえるように取り組んでいることが分かった。特に、みんなと食卓を囲むことを知らず食事自体に楽しみを感じた経験が少ない子どもに対しては特別な取り組みをするのではなく、まず食事自体が「おいしい」と感じられる食事を提供し続けることを意識していると感じられた。給食による食事提供をしているX施設だが、ユ

ニット職員が温かいものは温かいまま提供する、冷たいものは冷たいまま提供するという、食事において基本的なことを意識しているこゝろで子ども達が安心安全を感じられる食が提供できているのだろう。

## (3) 社会性構築のための「食」

三つ目の意味づけは、子ども達の社会性構築のための「食」である。施設にて集団で過ごし、施設退所後には自立し社会を生きていく子ども達に対して、「食」には社会性を構築することもできるとA氏は語った。

【A氏】しつけ的なものに偏るとせっかくの食事が楽しくなくなっちゃうので、段階は必要なんですけど、まあ最初からすごく高いものを望むようなことはあんまりしない方が多いかな。なので、嫌いなものを食べられるようにすることも大事だけれど、もっと大事なことは嫌いなものを上手に残せるようになってほしいですね。例えば「こんなもの食えないよ」じゃなくて「食べられません」って、食べられないって言うことを言うとか。調理する側も工夫するんですよ。食べられるように工夫したり。お互いがそういうふうになっていくこゝろが理想かなと思っているんです。小さく切ってあげてとか、好きなものと一緒に混ぜてあげて「食べられたね」とか、そのやり取りすごく大事なかなと思います。

A氏は食事の場を子ども達の社会性構築の場であるとも捉え、子ども達の状態に合わせて取り組みを行っていることが分かった。A氏は子ども達に対して「出された食事は残さず食べる」というこゝろよりも、「食べられないのであれば言葉にして伝えるこゝろ」を重視していると語りの中から感じられた。子ども達の「食べられない」という声に職員が応えるこゝろで「食べられない」というこゝろは責められないと子ども達が認識でき、「食えないよ」と相手を傷つけるような言葉を言うのではなく「食べられません」と丁寧に自分の気持ちを言葉にする大切さを学ぶこゝろができるだろう。

さらに、食事を提供する側と食事を提供される側がお互い気持ちよく食事ができるように、子ども達自身が自分の気持ちを職員に伝え、職員はその気持ちを受け止め工夫をしていることが明らかになった。そして、職員は食べることができたなど、子ども達の「できた行為」を認めるこゝろで子ども達の成功体



験となり、さらに自分の気持ちの伝える大切さを学ぶことができるのだろう。

#### 4. 実践していく上での課題

児童養護施設における「食」には様々な意味があり、施設職員は子ども達のために試行錯誤し日々、食を提供していることが分かった。では、食を提供したり、取り組みを実践したりする中での課題にはいったいどのようなことがあるのか。

##### (1) ユニット職員の技術差

一つ目の課題は、ユニット職員の調理技術の差である。職員の調理技術の差について B 氏と A 氏は次のように語った。

**【B 氏】調理慣れしてる人は自分でアレンジしてどんどんやっちゃうけど、なかなか不得手な人はやっぱりとりあえずこう決められたものでまずやってみたいな。**

先述のように、X 児童養護施設では朝食においてはユニットごとに許容度のある食事を提供することができ、子ども達の好みに合わせた工夫などを行うことで関係性構築などに繋げることができる。しかし、調理が得意な職員に比べ調理が苦手な職員は決められたメニューを作ることで精一杯になってしまい、職員間で差できてしまうという。さらに A 氏は続けてこう語った。

**【A 氏】ユニット間での格差も当然あるんですよ。差がやっぱり。料理が得意な職員がいれば、日常的においしいものが身近にあったりする。でもそうでない人たちは食事結構レベルが下がってしまう、プラス、調理に対して負担が大きいので日常生活も雑になったりするんですね。その辺はすごく悪循環になってくる。美味しいものを作れないから文句も出てくる、みたいなの。職員間も格差があったりします。**

ユニット職員は調理だけが仕事ではなく、日常で行う洗濯や掃除などの家事、子ども達の宿題サポートなども仕事である。しかし、調理が苦手な職員は食の負担が大きくなり、その他の家事がおろそかになってしまい、おろそかになってしまった分、子ども達から不満が出て信頼関係などにも影響してきてしまうといった悪循環な課題があるのだという。このように、ユニット職員の技術差から生まれる悪循

環にどのように対応していくのが今後の課題であると語りの中から推察した。

##### (2) 施設職員の意識差

二つ目の課題は、施設職員の食に対する意識の差である。X 施設では約 60 人の施設職員の食に対する意識の差について A 氏と C 氏は次のように語った。

**【A 氏】職員の個人差がやっぱりあったりするし、力量もその、技術の問題もそうですけど、基本的な考え方のずれがあって「普通こうだよな。」って言う話が「基本」のずれがあるから一律した食育ができないっていうのがあるのでそこはこうなかなか浸透していかない。**

食に関する取り組みなどは、職員の統一した意識が求められる。しかし、食に対する意識や「普通」とする基準が職員一人ひとり異なるため、それらの意見を統一させ、食育として確立して取り組みを行うことは非常に困難であるという。特に X 施設では子ども達に直接関わる職員は約 60 名近くいるため、さらに困難であると推察される。

続けて施設職員の意識差に関して、C 氏と B 氏が若い世代の職員について次のように語った。

**【C 氏】10 年前くらいまではなんだかんだできる職員が多くて、大変なんですけど子どものためにもなりますし頑張ろうって言ってたんです。でも今は…ほんとと特に若い時には厳しく言ってたんですよ、「食は大事だから」って。それでついてきてくれる人がいたんですけど今はそれを言うと成り立たないレベル。前になんかいろいろ食事のことをどうしていいかって話で最後 15 人くらいいた中でちょっと質問してみたんですね。「実際食の事って嫌いですか？」って。少し突っ込んだ、大事に思ってるか思っていないかみたいなの。そしたらやっぱりマイナスな意見ですね、ほとんど 9 割くらい。だから時代的にもやらない人も増えて言っているのかなっていう。**

若い世代の食の取り組みに対する意識は 10 年前と比較して低く、否定的な意見があることが分かった。C 氏は食の取り組みに対する意識の低さは時代的な背景があるのではないかと指摘した。時代的な背景として B 氏が次のように語った。

【B氏】トータルで職員の意識は低いと思います。今は、若い職員が増えてきてるっていうのがうち（X施設）の特徴なので、まあそれは時代なのかな。当たり前コンビニがあって「作る」って家庭でも昔とは違う教育を受けている中で、本当に難しい。ただ、子どもにとって大事なのはわかっている。でもなかなか難しい。

B氏は職員の意識の差の時代的な背景について言及した。最近では当たり前のようにコンビニエンスストアがあることや、スーパーマーケットのお総菜なども非常に充実していることから、家で食事を作らなくても困らない生活が送れるようになっているという。便利な反面、今まで家で調理をしてこなかったり、家で大人が調理をする場面をあまり見てこなかったりした職員が食事を作る側になった際に、調理の難しさや職員同士の意識の差に直面してしまい、子ども達にとって大切であると分かっている、結果的には食の取り組みに対してマイナスな意見が出てしまうのだという。

職員の食に対する意識の差をどのように統一させるかということや、意識の差があったとしても全員が取り組めるような取り組みを検討することが課題であると語りの中から推察した。

### （3）給食式配膳の課題

三つ目の課題は、施設の食事が給食式で配膳されていることである。給食式で配膳されることの課題についてA氏は次のように語った。

【A氏】こう給食スタイルでやっているとなかなかこう担当職員と子どもの関係のない人たちが作るの、やっぱり関係してないというか、関係が薄い人が立てる献立を食べてもなかなか食を通じた愛情であったり、気持ちを伝えるってすごく難しい。逆に生活が常に密着している関係性の中で作る、その人たちが作る料理だと食事を通していろんなことが伝えやすいんですよね。グループホームは、すごく、こう、食が密着した生活をしていると思うんですよね。全員が子どもと「今日の夜何食べたい」とか、そういう話から始まるんですね。そうすると、「生姜焼き食べたい」って言うのと「じゃあ生姜焼きにしようね」っていうそういうところからやり取りが始まるので。

X施設では朝食は各ユニットで職員が調理をするが、それ以外の食事については専属の栄養士が献立

を考え、専属の調理員が調理して提供している。すると、食事を提供するまでの過程などが無くなってしまったため、食事の提供は職員が行ったとしても愛情や気持ちなど食を通じたコミュニケーションは難しくなるという。さらにA氏は続けてこう語った。

【A氏】グループホームなんかの常に食が生活に密着しているところなんかはやっぱり子ども達は食事を楽しみにしたりだとか、食事についての話題が日常生活にあたりとかがあるので、生活に食が密着している環境ってすごく大事なことで、すごく感じている。目の前で作っている人で食べるものが仮にちょっとあんまりおいしくなくても、まあ「おいしい」とは言わないにしても「まずいから食えねえ」とは言わないですよ。だから作っている人が目の前に居たらそこまでのこう、なんていうかな、文句を言う子はあんまり見たことは無いですね。でも、誰が作ってるものかわからないものを提供してそれがあんまりおいしいものではなかったら平気で文句言っちゃうんですね。「そういうこと言うのはダメだよ」って言うても、やっぱり作っている人が見えないとまあそういう風になってしまうのは、仕方がないというか当然かなとは思っています。

多くの子ども達が入所する大舎制施設とは違い、少人数で生活するグループホームでは食と生活の密着度に差があり、誰がどのように作るのかという環境が子どもたちの食への意識に変化をもたらす可能性があるという点が語られた。誰がどのようにして作ったかが見えない給食式配膳方法は、子ども達に愛情や気持ち伝わりにくいということが課題であるという。このように、「作っている人が目の前に」いることや「作っている人が見える」ということを重視しているということが語りの中から感じられた。

## IV. 総合考察

### 1. 児童養護施設における「食」の意味づけと課題

本研究では、現職の児童養護施設職員へのインタビュー調査をもとに児童養護施設では食そのものや食の場面がどのように提供され、また、職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかについて考察をおこなった。本節ではその結果の概要について改めて整理していく。

X施設では、給食による食事提供を中心としつつ、

朝食においては決められた食材を基にユニットごとに職員が作るという特徴が見られた。これは、施設に入所する子ども達に日常的に大人が食事を作る姿を見せたり、食を通したコミュニケーションを促したりしているのだと考えられる。児童養護施設職員へのインタビュー調査の結果から分析を行うと、このような施設独自の取り組みが行われる背景には、施設職員が児童養護施設における「食」に様々な意味を見出し、職員それぞれが意識をもって日々子ども達と関わっていることが明らかになった。

意味づけの一つ目は、関係性構築の「食」である。児童養護施設における食の役割は非常に大きく、施設職員と子ども達の関係性を構築する上で大切なきっかけになっていた。職員が毎日子ども達に向けて食事を作っていることが子ども達に愛情を伝える手段の一つになっており、食事を与えられなかった等の被虐待経験がある子ども達にとって児童養護施設における食というのは、大人から愛情を受けられる大切な場になっているのだろう。

さらに、被虐待経験のある子ども達に関係する意味づけの二つ目は、安心安全を提供する「食」である。先述したように被虐待経験のある子どもの中にはまともに食事を与えられなかった子どももいる。そのため食事の場も虐待の場となってしまうっており、食事の場が楽しいものだとは知らないと推察される。そのような子ども達に対してX施設では給食による食事提供をしているが、最終調理を担当する職員は温かいものは温かく、冷たいものは冷たく提供するという食事において基本的な事を意識し、子ども達に食事の場は安心で安全であると感じてもらえるような取り組みを行っていた。このように温かいものは温かく、冷たいものは冷たくといった美味しいものを提供し続けるということは一般的にごく当たり前のことだろう。しかし、児童養護施設では当たり前のことを特に意識して行うことで当たり前を知らない子ども達が安心だと感じることであったり、一つ目の意味づけと同じように子ども達と職員の関係性を構築したりすることにつながるのだと考えられる。

三つ目の意味づけは、社会性構築のための「食」である。和田上<sup>2)</sup>によると、児童養護施設における食の場を単に栄養を得る場としてだけではなく、社会性構築の場などとして捉え、その点からの指摘も行われるなど多面的に評価もされていると報告し

ている。X施設でも同様に「食」の場を子ども達の社会性構築の場と捉え、取り組みを行っており、嫌いな食べ物が出てきた際には「こんなもの食えないよ」と言うのではなく「食べられません」と言葉にして言うことができるよう取り組んでいることが明らかとなった。この取り組みから社会性が構築され、子ども達は食事の場面だけではなくその他の場面においても子ども達は相手の気持ちを汲み取り、丁寧に言葉を選ぶことができるようになるのだと考えられる。

以上のように、食の場面における取り組みが明らかとなり、どれも食の場面だけにとどまらず職員との関係性や社会性の構築など子ども達の生活全体に通ずる取り組みであるといえる。そのため、児童養護施設における「食」というのは単に栄養を得るためだけの場ではなく、入所する子ども達の生活全体につながる重要な基盤であると考察できる。

一方、本研究では児童養護施設における「食」の取り組みには課題点があることも明らかになった。

一つ目の課題はユニット職員の技術差である。調理が苦手な職員にとって調理は負担が大きいため、調理以外の作業がおろそかになり子ども達との関係性にも影響が出て悪循環になってしまうという。一方で調理が得意な職員は子ども達の好みに合わせた食事や美味しい食事の提供ができることから、子ども達との関係性もスムーズにできる。このことから職員の調理の技術差というのは食の場面のみに影響が出るのではなく、食の場面以外にも影響が出てしまうといえる。これらの問題にそれぞれの施設では、調理が苦手な職員や負担に感じる職員に対して対策をする必要がある。

二つ目の課題は施設職員の食に対する意識の差である。施設職員一人ひとり今までの養育環境が異なり、それぞれの家庭での食に対する意識や教育も当然異なる。そのため職員が異なる意識をもったまま、施設における一律した食への取り組みは非常に困難であるという。さらに、職員の中でも特に若い世代の職員の食に対する意識が低い傾向にあるということが今回のインタビューの中で語られていた。これは、若い世代の職員が幼少期に大人が料理を作る姿を見てこなかったり、自分自身が料理を作ってこなかったりしたなどの社会的環境が関係しているといえる。このことから、今までの養育環境や食に関する経験が異なる大人が同じ意識をもって独立して



「食育」を実施していくことは非常に困難であるといえる。そのため、職員の食に対する差や経験の差をどのように統一させるのか、また、差があったとしても取り組める一律した食育について検討していくことが必要である。

三つ目の課題は食事が給食で提供されていることである。食事を給食で提供しているため、普段子ども達と関わる人が少ない人が食事を作ることになる。すると、愛情や気持ちなど食を通じたコミュニケーションは難しくなるという。対照的にグループホームなどの生活と食が密着している場であれば食事が提供されるだけではなく、提供されるまでの過程も見ることができ、食を通じたコミュニケーションがしやすくなるという。このことから、児童養護施設では食は誰がどのように作り提供しているのかということが子ども達の食への意識や職員とのコミュニケーションなど、生活に関係してくるといえる。これらの問題に対して、作っている人が見えない食事提供による職員の関わり方の工夫が必要である。

## 2. 本研究に残された課題

本研究では施設職員を対象に行ったインタビューから、施設職員は児童養護施設における「食」に様々な意味を見出し、児童養護施設に入所する子ども達にとって「食」の手厚い取り組みは重要であると実感していることが分かった。さらに、実感していながらも様々な問題点によって思うように取り組みができていない現状も合わせて明らかになった。今後はそれぞれの施設に合った食の取り組みについて検討していくことが必要とされる。また、本研究では若い職員の取り組みへの課題も語られた。今後は子ども達との直接的な関わりが少ない職員だけでなく、幅広く子どもに関わっている職員にも聞き取りをしていくことや年齢や職員歴を分けて調査をす

ることで、職員の意識差や課題について明らかにするとも必要とされる。

さらに、本研究では一つのユニット制の児童養護施設を対象とした児童養護施設における食そのものや食の場面がどのように提供され、また、施設職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかのについて明らかにすることにとどまった。そのため今後は、小舎制施設やグループホームなどの様々な形態の施設を対象としたさらなる研究を行うことで、施設形態が食に与える影響についても検討することが必要だと考える。

## 謝辞

本研究にご協力くださいましたX児童養護施設の職員の皆様に深く感謝申し上げます。

## 参考

- 1) 隈元晴子・岩田絢那：料理教室が児童養護施設入所児童の食知識、スキル、自己効力感に与える影響に関する研究、藤女子大学人間生活学部紀要、57, 61-69. (2020)
- 2) 和田上貴昭：児童養護施設における食に関する研究、社会事業研究年報、41, 305-316. (2005)
- 3) こども家庭庁：「施設入所児童の推移」（閲覧日 2023.10.10）  
[https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/2067db91-4b40-455d-b11d-1bcdceb2e37d/e47bcd55/20230516\\_councils\\_shin\\_gikai\\_shakai\\_katei\\_Mag6djKb\\_08.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/2067db91-4b40-455d-b11d-1bcdceb2e37d/e47bcd55/20230516_councils_shin_gikai_shakai_katei_Mag6djKb_08.pdf)
- 4) 厚生労働省子ども家庭局厚生労働省社会援護局障害保健福祉部：児童養護施設入所児童等調査の概要（閲覧日 2022.11.27）  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11923000/001077520.pdf>